



## 海という名の本屋が消えた (60)

平野義昌

## 鈴木商店 その4

鈴木商店焼打ち後、新聞報道、言論・政治運動は大きな転機を迎える。「大阪朝日」は焼打ち事件を「遺憾」と書きつつ鈴木攻撃を継続していた。ところが、8月14日、寺内内閣は騒動拡散防止と治安維持のため米価と米騒動事件に関する一切の記事を禁止する。新聞社に禁止令が届いたのは14日夜から15日未明、15日付け朝刊活字は組みあがっていた。各社は活字鉛版の当該記事を削って印刷した。

25日、大阪のホテルで新聞社86社、記者166名が集まり、「大阪朝日」社長を座長に報道禁止令に抗議した。警察が集会の模様を報道した「大阪朝日」同日夕刊記事を問題にした。記事は「史記」にある故事「白虹目を貫く」を引用して、禁止令は大日本帝国にとって不吉な兆し、と書いた。故事は、燕の太子が秦王暗殺の刺客を派遣した時、白い虹が太陽を貫いて見えたことから、兵乱・革命の前兆を意味する。政府は批判記事に手を焼いていたが、この機会を見逃さなかった。「大阪朝日」を新聞紙法違反(朝憲紊乱)で告発、発行禁止と不敬罪で追及する。

9月、寺内内閣は米騒動の責任を取って退陣し、国民に人気の高い原敬が首相に就任する。原は記事禁止令を継続した。「大阪朝日」社長は右翼暴漢に襲われても、編輯局を叱咤激励した。しかし、発禁と不敬罪には抵抗できなかった。10月、社長辞任、編輯局長と社会部長も退社する。新編輯局長は、「近年の言論すこぶる穏健を欠くものありしを自覚」と自己批判し、「国家の安泰と国民の幸福」「文化の日進国運の隆昌」「不偏不党、公平無私、正義人道、穏健妥当」などの編輯綱領を発表した。裁判の判決は執筆者と発行人禁錮2ヵ月。新社長は原首相(法務大臣兼任)に呼び出され、今後再発なきこと、寛大な判決であり控訴しないこと、新綱領の精神貫徹を約束した。註1

言論機関の敗北である。報道・言論の自由は大きく後退する。権力側は絶対的な切り札＝朝憲紊乱・不敬罪を自覚した。やがて治安維持法制定に進んで行く。

原は新聞記者から外務官僚になり、大阪毎日新聞社長を経て、立憲政友会に参加し、1902(明治35)年衆議院議員当選。平民宰相と言われるが、ほんとは盛岡藩士族出身。米騒動を取束し、シベリア撤退、財政再建、軍縮、教育改革を実行した。一方、普通選挙に反対するなど大正デモクラシーに理解を示さず、政友会の政治資金スキャンダルも起きた。弱腰外交を批判する勢力もあった。21(大正10)年、東京駅で暴漢に襲われ、在職中に暗殺された最初の首相となる。

言論界では大正デモクラシーの代表・吉野作造が民衆に支持されていた。白虹事件で勢いづいた右翼団体が吉野を攻撃し、公開討論を開催する。聴衆が吉野応援に集まった。一般民衆は米騒動で内閣が退陣したことによって、示威行動の力を知った。労働運動による権利拡大を求めていく。神戸では21(大正10)年の川崎・三菱の大争議につながる。

米騒動後、神戸で警察に検挙された者は合計2034名。うち5年以上の実刑は89名で、未解放部

落民が22名いたことから、騒動の主体は未解放部落民という説が流れた。〈……これは未解放部落民が集团的に米の強買(こわがい)に出たため、一網打尽に検挙されたこと、米を黙って持って来れば窃盗罪で微罪であったのに、交渉して安く買ったために強盗罪で重罪になるなどという事情があったためであり、為政者側が後には故意に未解放部落民を悪役に仕立てた形跡がある。民衆運動を限られた一群の人々の動きのせいにしてしまうという論法である。〉註1

警察は煽動者として逮捕した者たちについて、野党や社会主義者との関係を綿密に調べたが、関連は発見できなかった。註2

本章(その1)で、米屋の主人が「社会主義者の仕業」と思い込んだと紹介した。鈴木商店・西川支配人は温厚なインテリであるが、鈴木批判を繰り返す「大阪朝日」に対して「社会主義者共」と敵意を持った。西川は社会主義者を名乗る記者来訪に危険を感じたし、キリスト教社会主義者・賀川豊彦の貧民救済活動が行政の信頼を得ていたことも気になっていた。社会主義への怯えが広がった。だが、社会主義者として検挙されたのは先の記者のみである。彼の罪名は恐喝罪だった。註2

戦後社会党委員長を勤めた鈴木茂三郎(もきぶろう、1893～1970年)は新聞記者時代に神戸の米騒動を取材した。後に労働運動に参加した人物である。1964(昭和39)年の講演で、焼打ち現場記事で群衆を2万余名と書いたことを記者的誇張、人数はよくわからなかった、と告白した。シベリア出兵と財閥の暗躍にも言及し、財閥系商社社員から直接米買い占めと輸出を聞いたと証言するが、物的証拠はない。社会主義者の立場から米騒動の分析をして、のちの社会運動へのつながりを述べている。

〈戦争があったから、米騒動があったんだ。これは、資本主義の特徴ですよ。米は、資本家としては、いちばん手っ取り早くもうかる。たたいて買って、つり上げて売ればいい〉註1

社会主義者は米騒動に直接の関わりなきさうだ。神戸が開港後、港町として栄え、造船や鉄鋼はじめ工業が発展し、外部から多くの労働力が流入してきた。人口は1897(明治30)年の19万人から1906(明治39)年34万人を超え、19(大正8)年には60万人に達している。特に三菱・川崎造船所に近い湊東区・湊西区(現在の兵庫区)に集中した。註3

急激な人口増加・都市化は貧困という問題を抱えた。食であり住である。貧困問題で社会主義者が動いた、という推理は成り立つ。米の鈴木商店と不動産管理の兵神館(値上げと厳しい取り立てで「悪逆非道の代表」と言われた註2)が狙い撃ちにされた理屈もわかる。アジ演説で煽動した者、けしかけた者、暴走した者もいた。だが、彼らの後ろには騒動を支持する多くの群衆がいたのである。

焼打ち事件は、政治的な思惑が絡んだ不確かな情報が繰り返されたことによって民衆の切迫した不安が暴発した、と言える。鈴木商店や米屋にはあまりに気の毒な事件だった。

最後に、鈴木商店と海文堂書店の関係について書いておきたい。海文堂は1925～26(大正14～15)年に『海事大辞書』(住田正一編、全3巻)と

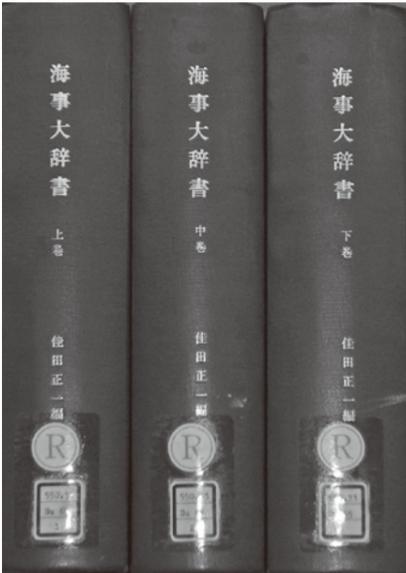
いう豪華本を出版した。下巻「序」で関係団体・企業の後援・援助に感謝を表明し、「金子直吉」の名がある。編者の住田は法学士とあるが、鈴木商店現役社員。18(大正7)年、東京帝国大学を卒業して鈴木入社、金子の秘書を勤めた。金子の著書『経済夜話』(厳松堂書店、1924年)の口述筆記もした。鈴木破綻後も金子の元で整理に奔走した。退社後は海運・造船界で活動しながら、海事史研究で多大な業績を残している。この『海事大辞書』は海文堂が総力をあげて企画・出版したものの、売れ行きは芳しくなかった。海文堂は倒産の危機に陥った。以下は私の推測だ。海文堂創業者は海運業界出身である。海文堂は海事図書出版・販売で鈴木商店とかなりの取り引きがあったはずだ。『海事大辞書』は鈴木への支援ありきの出版だったのではないか。焼打ち後とは言葉、鈴木安泰時代に企画され、住田が編者として取り仕切ったと思われる。鈴木関連会社や取り引き先の買い上げを見込んだだろう。完成時、鈴木経営は四苦八苦状態である。時期的に付合するだけのこと、証拠となる資料はない。尚、住田は海文堂から24(大正13)年に『運賃論』(発行所名、賀集海文堂)を出版し、35、37、38(昭和10、12、13)年に海事随筆集を3冊出版(発行所名は35、37年海文堂、38年海文堂書店)している。

現在『海事大辞書』は海文堂出版に保存されている。私は海文堂書店在職中の2012(平成24)年4月に原本を見た。ある団体から寄贈され、すぐ別の団体に寄贈した。本そのものは神戸市立中央図書館で閲覧可能だが、表紙は保存のため補強・改装されてオリジナルの姿ではない。私は原本を手にした時は鈴木商店との関係に考えが及ばなかった。原本に触れる機会はないだろう。書物との出会いは誠に一期一会と思い知った次第である。

註1 城山三郎『鼠 鈴木商店焼打ち事件』文春文庫、1975年

註2 井上清・渡部徹編『米騒動の研究 第三巻』有斐閣、1960年

註3 松原隆一郎『頼介伝』苦菜堂、2018年



『海事大辞書』海文堂

## 出来事ファイル (No.18-11)

## ■第3版元町商店街ショッピングガイド

元町商店街では、会員事業所を紹介するショッピングガイドを作成、広く配布してきた一方、みなと元町タウン協議会は「港町の歴史を歩く地図」を作成してきた。元町周辺地域すべての案内をまとめる方が利用者にとって便利と考え、2種類の地図を1冊にまとめて製作発行、このほど同案内第3版が完成した。「元町ショッピングガイド」と「港町の歴史を歩く地図」両面表紙刷りのため、異種の地図と違って2部持ち去る人も。



## ■西元町駅 エレベーター設置決まる

阪神電鉄の西元町駅に対し、地元ではエレベーターの設置を求めてきたが、このほど阪神電鉄から、工事施工決定の通知があった。エレベーターの地上乗降場は、元町通6丁目入り口付近に当る中央幹線南側歩道上になる。工事はこれから準備にかけられ、完成は2年後になる。改札内・外共用エレベーターで、地上から改札口、改札口からホームまで、2段階構えの設計。



エレベーター乗降場予定地

## ■賑わったストリートコンサート

元町ミュージックウィーク開催日の週末を狙うようにやってきた今年9月の台風。初体験の天気予報で気をむむ事務局だったが、アーケードのない一部会場だけは中止になったものの、その他の会場では予定通り開催した。3丁目風月堂ミュージアム前の会場では、アーケード下ながら空に見える会場で、開催日は、終日、大勢の観客に恵まれ賑わった。



## ■栄町通に走水神社案内標識登場

協議会地域に唯一鎮座する走水神社は、元町5・6丁目の氏神として崇敬されている。マンションの増加で小学生の数も増え、1昨年から7月の祭日には子供みこしも復活、にぎわいを見せるようになった。走水神社では、元町の氏神として広く知ってもらいたいと警察に案内板の設置を依頼、このほど栄町通の信号機の柱を利用して「走水神社」の案内板が掲出された。



## ■まちかど救急ステーション

9月8日(土)、恒例の「こうべ中央救急フェア2018」パレードが元町商店街で開かれた。6丁目目出発式を行い、消防音楽隊の先導で1番街に向かって行進した。パレード牽引役の小学生14名が、台風警報の発令で参加できなくなったのは初めてのこと。行進終了後、一番街の東入り口では、恒例のAED体験など、救急医療に関する相談テーブルが設けられ、にぎわった。



1番街東入り口に設けられた相談コーナー

## ■第2土曜日はモトクロ市

元町6丁目商店街では9月8日(土)、モトクロ市を開催した。車の片側をオープンにした舞台では音楽が、路上では猿回しも登場。6丁目の中央路上にはさまざまな店舗が店を開き、6丁目全体が賑わった。但し、今年の9月8日は救急パレードの日と重なり、準備作業にテンヤワンヤ。元町6丁目商店街では、今後、毎月第2土曜日をモトクロ市の日として、10時～17時まで開催する。



## ■韓国視察団がやってきた

9月19日(水)、韓国の商店街で商う店主たちの団体が元町商店街視察に訪れ、パルパローレ4階の会議室で懇談した。店舗数や若い店主の数、商店街の歴史、取扱品目、観光客誘致のための方法、地域社会への貢献、店主向けの教育、行政との関係、人気の商品と店舗、地域住民との交流、空き店舗状況など、幅広い質問に連合会の近藤会長が対応した。



## ■神明 中国で精米を販売

弊協議会会員でコメ卸最大手の神明は8月8日、中国遼寧省丹東に設けた精米工場の稼働開始式典を開いた。同社は、地元農家と契約、農家が収穫したコメを、もみすりや異物除去など、精米の各工程で加工状況を数値化、品質を管理して安全性をアピールする。食品安全に関する国際認証も取得。品種や精米日などの生産流通履歴も把握できるようにした、という。



遼寧省丹東の精米工場でコメを袋に詰める従業員ら(神戸新聞より)

## □読者プレゼント

天和2(1682)年、松平直明が越前大野から明石城に入封して以降、越前松平家が藩主をつとめました。この時期の遺物は、瓦や陶磁器をはじめ、武家屋敷跡や町屋跡から数多く見つかっています。こうした出土品を通して、城下の変遷や人々の暮らしを紹介する展覧会です。

鑑賞ご希望の方は、住所・氏名・年齢・本紙へのひと言を添えて編集部まで。先着順で5組の方にペア招待券をお送りします。

期間：  
11月3日(土・祝)  
～12月19日(日)

会場：  
明石市立文化博物館  
電話：  
078-918-5400



和蘭陀人形(長寿院)